

平成28年度第3回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成29年3月17日)

1 開会

15:00

2 教育委員会あいさつ

3 議事

○ 幼小中連携モデル校、先進校の成果と課題

○ 小中一貫教育ポリシー、H29年度以降のスケジュール案

古賀座長	では、幼小中連携モデル校の取組についてご紹介をお願いします。
竹下委員	<p>モデル校の発表会の日、1年生は、「幼稚園生が小学校に入学してきて困らないように、どんなことを伝えるか」について話し合う授業だった。今日は、その後向山幼稚園児を呼んで「わくわくハッピーコーナー」という交流会を行ったので、その様子を紹介する。</p> <p>(写真を提示しながらの紹介)</p> <p>向山幼稚園の園児と保護者を対象に、小学校入学にあたりどんな気持ちかのアンケート結果を見ると、11月よりも3月の方が「楽しみ」「とても楽しみ」と答えた人数の割合が、園児も保護者も多くなっていた。</p> <p>6年生の総合的な学習の時間では「まごころ町民になろう」という単元で、まちづくりに関する授業を行った。これまでは、地域学習をした後に発表をしたり、家庭科との関連学習を行ったり、地域の公園、道路などの清掃を行ったりしていた。今年は、町の方々の姿に学ぶことを中心に取組を進めた。町の方々を中心にすえたのは、向山校区の地域力が大変すばらしいことを熊本地震の際に再確認したからである。また、6年生の国語で「町の幸福論」という教材がある。それとの関連的指導を行った。</p> <p>モデル校公開授業の日は、熊大の田中尚人先生をゲストティーチャーに招いて、架空の町の行事が盛り上がるように、グループで問題の解決方法を考える授業を行った。授業後には、子ども達が「町の方々の気持ちがわかった。」「子どもでも意見を言うことが大切だと思った。」「これから、町づくりに参加していきたい。」という意見をもっていた。</p>
古賀座長	次に、先進校である富合小中学校の実践についてご紹介をお願いします。
大窪委員	<p>小中一貫教育の取組は、やってみて価値はあることが分かったので、来年度も続けていきたい。ただし、学力向上にはつながらない。なぜなら、乗り入れ授業は国語や数学などの測定教科ではないためである。英語はコミュニケーションを主とするので、点数の伸びに結び付きにくい。</p> <p>以前は数学や国語でも乗り入れができていた。それができるようになると、今とは状況が違ってくるのではないかと思う。</p> <p>次年度の課題としては、小学校から中学校へ先生方が来るようになるこ</p>

古賀座長	<p>と。距離が離れているのが最大の問題点で、なかなか実現しない。しかし、中学校に来て子どもや授業の様子を見ることで、小学校の先生方が、自分の教え方について考えることにつながる。例えば理科などは、学年が上がるにつれて抽象度が増していく。小学校の時に実験や体験などを通して具体的に考えていなければ、中学校や高等学校で理解するのが難しくなる。中学校の授業を見てもらうことで、中学校の授業がどんな状況なのか、小学校段階でどんな力をつけていなければいけないか、理解できると思う。</p> <p>英語の取り組みは他の学校の参考になると思う。中学生は、最初からしゃべれるし、英語に対する抵抗も少ない。しかし、ペーパーテストの結果にはつながらないので、ギャップを埋める手立てが必要である。</p> <p>小中合同の研修会、研究会は、かなり多く行っている。合同委員会も、他の学校でもやった方がよいと思う。今年は、保健委員会も歯をテーマにして合同で行った。生徒指導でも行っている。放課後の実施なので、授業時数が減らない。他のところでもやる甲斐がある。合同行事も子どもにとってプラスになる。</p> <p>地域の小中一貫教育に対する思いは強い。特に、学力の向上が期待されている。アクティブ・ラーニングと言われているが、富合中では「意図的班編成による学び合い」「ICTの活用」「思考の可視化」の3つを中心に行い、小学校も歩調を合わせて行うようにしている。子どもにとっても学びやすい。生活習慣や家庭学習についても、小中学校で合わせていきたい。</p> <p>中学校の授業研究会に、小学校の先生方にも来てもらった。小学校の先生方には、「意図的班編成による学び合い」「ICTの活用」「思考の可視化」のうちのみ1つでもいいので取り組んでもらうようにした。授業参観の際の評価シートも、「意図的班編成による学び合い」「ICTの活用」「思考の可視化」の項目別で作成した。</p> <p>富合の小中一貫教育について、もう一度とらえ直してシートにまとめ「国際科英語」「体験活動」「学びの充実」3本柱として、更にそれらの土台となる家庭学習と、整理しなおした。「アクティブ・ラーニング」や「深い学び」などの言葉が先行しているので、21世紀型スキルや21世紀型能力などの図を示しながら説明している。教え合いをすると学力が伸びるということを、子どもにも示しながら、予習、授業、復習という「黄金のサイクル」を推奨したり、「土日課題」と「まとめノート」の実践を行ったりしている。</p> <p>二つの実践事例を紹介していただいた。「全国学力・学習状況調査」でも、学力と生活の在り方について、関連が指摘されている。学力の向上について成果が出てくれば、小中一貫教育に対する保護者の関心も高まるの</p>
------	---

大窪委員	<p>ではないか。</p> <p>前任校でのクロス処理では、相関関係が見られた。本校でも、集計を進めている。</p>
宮本委員	<p>合同の行事や合同研修会は素晴らしいと思うが、事前の準備は大変ではないか。距離的な問題もあるが、メール等で行うのか。それとも実際に会って計画しているのか。</p>
大窪委員	<p>確かに事前の準備は大変で、その点も含めて見直しを考えているところである。合同研修会は、年度初めに管理職と研究担当で方向性等の打ち合わせはする。色々と実施しているので、離れた中で何ができるのかも研究していきたい。保健や生徒指導の合同委員会は今後も実施していきたい。小学校と中学校は文化が違うと言われるが、小中学校の先生方が違いを分かたうえで何ができるかを考えるのが大事だと思う。できるだけ会々と、何かあったときに相談しやすい関係も築ける。十分打ち合わせができないからしないというのではなく、会うこと自体が理解を深める第一歩ととらえており、そのようなことが小中一貫教育に関する法令にも書かれている。やりながら考えるという状況である。</p>
濱平委員	<p>兼務体制についての報告があったが、中学校教諭の専門性を生かした指導により、子どもの関心意欲が高まったり、表現の幅が広がったりすることがあると思う。先生方にとっては、家庭科や音楽、技術の教科では、「意図的班編成による学び合い」「ICTの活用」「思考の可視化」等、学び合いの方法を取り入れやすいのではないかと。教科の中で生徒が学び、それを見ている先生方が学ぶといった効果は見られなかったのか。</p>
大窪委員	<p>先生方の意識調査をそこまで詳しくとっていない。兼務をしている先生から聞き取ったことだが、家庭科の先生が小学校に出向いた時にはできるだけ職員室にいるようにして、小学校の先生から、ICTの活用について質問のあったことについて実践例を紹介するなど、研修会以外でも伝えるという効果はある。時数の少ない教科に限られるが、効果はある。さらに、小学校の先生が中学校に出向いて、自分の教えた子どもたちがどんな理解の仕方をするのか見ていただくことで、小中一貫教育の効果が高まると思う。中学校の職員も余裕がない中で精一杯の取り組みをしている。小学校で授業を行い、できるだけ職員室にいて情報収集などを行っているため、小学校から中学校にも来ていただくとありがたい。</p>

(平成29年3月17日)

濱平委員	<p>定数の関係や少人数の縛りなどもあると思うが、時数の少ない教科をうまくやりくりして定数の枠を利用し、自由に兼務等もできるよう認めてもらえれば、もっとやれることが広がると思う。</p> <p>言いたかったのは、専門家が早い段階で指導に当たることで、評価の見える化をしたときに本来は見えにくかった家庭科や美術などで、子どもの何らかの成長が見られなかったのかということである。国語や数学などの学力としてではなく、広い意味での成果という点で、説得材料にならないかと考えたので質問した。</p>
大窪委員	<p>中学校の英語の先生によると、小学校に行かないときに比べると最初からよくしゃべれるということだし、家庭科の先生からは小学校よりも伸びたと聞いているので中学校にとってもいいことだと考えている。客観性がないので客観的なものさしで測定することも考えていかなければならない。</p>
古賀座長	<p>私の方からは、向山小学校のモデル校発表について感想を述べる。まずは幼稚園等の就学前教育でどのような育ちがあるのかが基本になるが、その意味で、小学校1年生の公開授業は興味深かった。指導者の組み立てもよく、子ども達が「自分はこんなことをしたい」と考えるのではなく「こんなことをしたら園児が喜ぶだろう」ということを考えさせられていた。小学生と園児との関係性をつくって考えさせられていた。今後の授業づくりの視点としては、幼稚園は「『生きる力』の基礎」を育むこと、小学校は「生きる力」を育むことをねらいとしているので、その「基礎」の部分とは何なのかということについて、場面場面での育てたい心情や態度について相互にやり取りをしながら分析をされていくことで、小学校の授業づくりにつながっていくのではないかと思う。もう一つは、6年生の「まごころ町民」についてだが、ゲストティーチャーとして熊大の田中先生も参加し、コミュニティデザインを考える授業だった。この取り組みは中学校、高等学校での有権者教育、主権者教育につながると思う。中学校に行ったときには、子ども達にとってより身近な「市議員選挙」を想定した模擬選挙などを行う際に、「まごころ町民」での取組を生かすことで、形式だけでなく、本質を考えることができるのではないか。中学校へつながる可能性を秘めており、また、子どもたちが意欲的な発表しており、素晴らしい授業だった。</p> <p>では、小中一貫教育ポリシー、推進スケジュールについて意見や質問をお願いしたい。</p>

磯田委員	<p>乗り入れ授業等について、年度末に発表の場や結果報告の場はあるのか。</p>
事務局	<p>成果や課題等をまとめ、実践報告として出してもらおうように考えている。</p>
古賀座長	<p>乗り入れ授業について意見が出たので、その点で話を進める。乗り入れ授業が難しい理由は何か、改善点については何かについて、意見はあるか。</p>
志垣委員	<p>自分の学校に照らし合わせて考えると、マンパワーが足りない。中学校から小学校に授業に行くことは、現実問題として厳しい。職員の加配が必要である。また、平成 30 年度から土曜授業が実施されると聞いている。土曜授業を活用すると比較的やりやすいかと思う。特定の教科に限定すると時数との兼ね合いからやりづらさが生じるので、道徳などから入っていくと授業時数の少ない職員でできるので、取り組みやすいか考えた。</p> <p>取り掛かりはどこからするのかということが大事になると思う。まずは自分の学校の組織づくりをきっちりやっておくことが大事で、それができていないと他校に出向く計画もできない。また、複数の小学校と連携している中学校は、3つや4つの小学校に出かけることになるので、しっかりとした計画性が必要になってくる。顔が見える関係という話題も出たので、計画も一つの目的ではあるかもしれないが、時間を生み出すこととどこから乗り入れ授業を進めるのかがポイントになると思う。乗り入れ授業は成果があるので、しなくちゃいけないことだと思うが、職員がやろうという流れになるためには、切り口としてどこから進めていくかが大事だと思う。</p> <p>意見は変わるかもしれないが、指導課から出ている授業づくりの5つの視点について、小中で校区ごとに重点項目を決めて連携して進めるなど、できるところからしていかないと、現場では厳しい。生徒指導に追われるなど他の事務処理で忙しい中で、せっかくの空き時間を奪われれば、職員の負担感が増すだろう。</p>
磯田委員	<p>P T A の立場からすると、連携のとり方としては、区がまたいでいる場合は3校協議会などを行っている。定期総会や懇親会など毎年行われて、人が入れ替わっても全体的な体制は保たれている。1中1小の校区と1中と多くの小学校が連携する校区では抱える課題が違うので、スケジュール通りですぐに浸透する校区と、5年10年かかって進む校区があるのでは</p>

平成 28 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 3 月 17 日)

古賀座長	<p>ないか。年度の初めに関係学校が連携する会合を開くとか、学期 1 回は開くようにするとか、体制づくりをするといいいのではないか。</p> <p>1 小 1 中とそうでないところがある点、幼小中連携の在り方について差があるという点、この 2 点についてが大きな問題点であろう。今回の提案としては幼小中連携の日を何とか形にしていこうというものである。</p> <p>また、人間というものは、困っていることならば何とか解決していこうとするものである。中学校は生徒指導が大変だということもあるかと思うが、乗り入れ授業を難しく考えるのではなく、中学校の先生方が、小学校 5 年生や 6 年生とふれあうような、「ふれあい交流」としてできるところからおこなっていけばいいのではないだろうか。</p>
濱平委員	<p>どんなことを中心として柱とするのかで乗り入れ方も変わってくると思う。教科の時数が少ない先生が小学校に行く可能性が高くなるのだろうが、その教科が柱になる場合はそれでいいかもしれないが、そうでない場合は、生徒指導や特別活動の先生が小学校にアドバイザーとなるという方法もあるのかと思う。乗り入れ方について考える必要がある。</p>
大窪委員	<p>始めに小学校の先生が中学校に来られないという話をした。工夫次第では来ることができると思うが、なかなか実現しない。富合でさえ小学校の先生にとってみれば、中学校に出向くのはハードルが高いようである。それが突破できないと先に進まないと思う。実際問題として、打合せ等の問題もあり、道徳などで授業に来てもらうのも難しい状況である。お互いの違いを理解したうえで連携して取り組むことを決めるのも、膨大なエネルギーがいる。この場合のエネルギーは時間である。合同授業研究会や合同研修会では行き来があるが、乗り入れ授業は難しい。中学校の先生が小学校に行くのも大変だが、小学校の先生が中学校に行くのはもっと大変である。</p>
志垣委員	<p>本校では、小学校 6 年生の子どもたちが中学校に来て、模擬授業を受け、部活動体験をしている。大きく構えるのではなく、今行っていることをもう少し膨らませるなどして、スムーズな流れを考えていきたい。</p>
大窪委員	<p>生徒指導の合同委員会はやれると思う。年に 3 回ぐらい放課後での実施や夏の研修なども有効である。</p>
宮本委員	<p>1 小 1 中は少しはやりやすいだろうが、そうでないところは小学校の先</p>

平成 28 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 3 月 17 日)

古賀座長	<p>生が中学校に行くのは、中学校では専門性が必要とされるのでハードルが高い。合同の行事や、合同の委員会などでふれあいの中で顔を知ってもらうなど、ステップを踏むことが必要だと思う。</p> <p>県内で小中一貫教育を行っているところでは、保健委員会を合同でやる等、校務分掌レベルでとらえて一緒に行っているところもある。大窪委員が指摘されたことでもあるが、家庭学習の習慣は 10 歳までにつくられると言われており、小学校でできなかったものは中学校になってできるようになるのは難しい。向山校区で作られた「育ちのものさし」を小学校と中学校で共有化することで、授業を見るときに授業の方法だけを見るのではなく、子どもの育ちを縦に見て、課題の共有化を図ることができるようになっていく。小中連携は確かに大変だが、子ども達にとっていい結果をもたらすという仮説のもとに取り組んでいる。私は、ホップ、ステップ、ジャンプと 3 段階で考えるのだが、まず入り口の段階としての交流、次に接続、接続は年長と小 1 の接続、そして小 6 と中 1 の接続、そして最後の段階が一貫である。したがって、それぞれの学校が交流から始めるのか、それともスタートカリキュラムが実質化されたならば接続の部分から始めるのか、実態に応じた取り組みになってくるであろう。</p>
志垣委員	<p>校長会を開催し全体的な啓発をした後、分科会の時間にして校区ごとに話し合う場を委員会主催で開催しないと、なかなか進まないのではないかと。校長が校区ごとに集まって、付けたい力は何かなどを話し合う場を設定しないと、具現化しないと思う。夏休みなどでもいいので、ぜひ校長会を設定してほしい。</p>
佐土原委員	<p>中学校区ごとの校長会はないのか。</p>
志垣委員	<p>中学校区による。あるところもあればないところもある。</p>
佐土原委員	<p>私の校区では、中学校区ごとに月に 1 回校長会が開かれているので、それによって先生方の思いも広がっていくのではないかと思っていた。保護者は小学校も中学校も行き来するので様子が分かっているが、先生方は両方行かれる方は少ないので、違う校種は想像しにくいのかとも思う。お互いに意識をもってもらいたいと思っていた。</p>
古賀座長	<p>平成 29 年度になったら、1 学期を準備期間とし、夏休みになったら校長先生方の会議で説明できるようにするという話であった。急ぐというこ</p>

平成 28 年度第 3 回熊本市小中一貫教育検討委員会議事録

(平成 29 年 3 月 17 日)

<p>大窪委員</p>	<p>とではないがスタートダッシュという程度に、まずは校長先生方の了承をとる、合意を図るという意見が出された。他にはないか。</p> <p>校長先生方がまた、先生方が、これをどれだけ必要感をもってできるかだと思う。前任校は、比較的、小中で連携してやってきたが、その学校でもゲストティーチャーで行くようなことはしていたが、先生方の行き来はなかった。これから全部の学校でするとなったときに、中学校の先生方が小学校に行くということは、それだけ時間がかかり自由度が奪われるので、現実的には厳しいのではないか。富合では意識が高く、乗り入れ授業はすべきものとして先生方がとらえているが、他校でその意識にもっていくのは難しいのではないか。中学校は中学校で土日課題や黄金のサイクルなどすべきことがあり、無理のないようにしていかないと進まないと感じる。先生方の意識を変えるのが一番の課題だと思う。やっていった方がいいものを富合ではやっていっている。</p>
<p>古賀座長</p>	<p>平成 28 年度の本委員会の大きな役割は、平成 29 年度からの実施ができるだけ無理のない実施になるよう検討することであった。課題を見出し、それに対してどういった手立てを講じるかについて意見を交換していただいた。</p> <p>全国的にも小中一貫教育の動きは大きく進み、熊本県でも高森町に平成 29 年 4 月から義務教育学校がスタートし、1 年後には産山村でもスタートする。これまでは比較的動きが見られなかったが、今後一気に進む可能性もある。そんな時に学校現場が困らないよう、5 年間ぐらいの中・長期的な視点で考え、平成 29 年度はそのための準備期間ととらえればどうか。実は、この取り組みは、本日の事例発表にもあったように、カリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニングなど、次期学習指導要領にも合致しているものである。学校の先生方にも、これから求められる学校の役割ということで取組んでいただけるのではないか。</p> <p>本日は様々なご意見をいただき、以上のようにまとめることができた。また次年度に生かすとともに、今年度でご退職の方々には学校の応援団という立場で今後ご協力を願えればと思う。</p> <p>では、これで平成 28 年度第 3 回小中一貫教育検討委員会を終了する。</p>